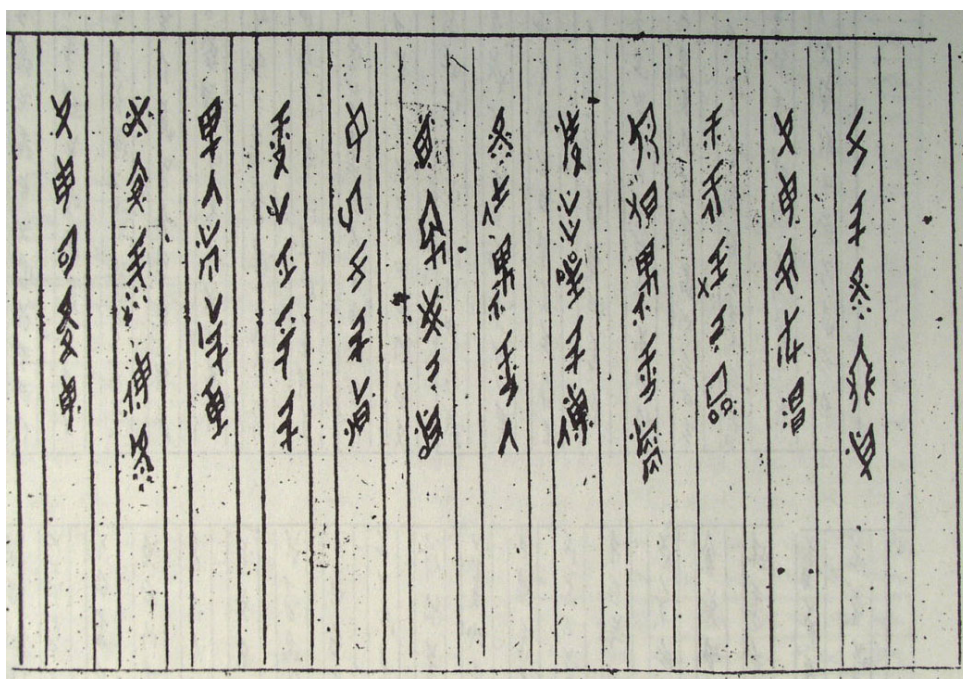


女書（ニョシヨ。漢字系文字・派生）

■以下は女書の資料である。趙麗明 1992(p. 900)による。



■女書は中国湖南省の中国語方言を表記したもので、当地の女性だけが使用することより、女書と呼ばれる。外形は縦長の菱形で、やや右に傾いている。字数は異体字を含め約 3,600。字形の由来と文字発生の時期については諸説あるが、約 600 の漢字楷書体に基づき、明末清初から清代中期頃に発生し今に至ったとする説が穏当なところであろう。

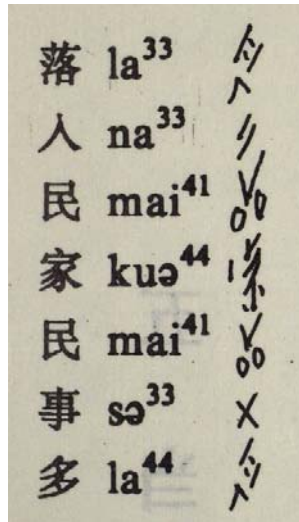
1 字は 1 音節で、縦に右から左に向かって書き、意味の切れ目を明示しない点は漢字と同様であるが、その字形は漢字と趣を異にする。一見して基づく漢字を推測することができるものもあるが、多くは比較検討の後に漢字との関係が判明する。また、音節の利用の仕方も漢字とは異なる。すなわち、同音および近似音の間で文字の仮借が頻繁に繰り返された結果、特定の字義を担う機能が弱まり、日本の仮名のような音節文字の様相を呈するに至った。しかし、表意の機能が完全に失われているわけではない。

■以下は女書の一部を抜き出したもの。これも趙麗明 1992(p. 588)による。右が女書、中央がその発音、左が相当する漢字である。「落入民家民事多」（民家に嫁に入ると民草(たみぐさ)の仕事が多い）という意味のことを女書で記してある。同音の語は同一の女書で書かれており、音節文字の様相を呈していることがわかる。すなわち、

- ・「入」と「二」（数字）に相当する語は同音であるため、漢字楷書「二」を右上がりに変形して作った女書で「入」に相当する語を記している。
- ・「事」と「十」（数字）に相当する語は同音であるため、漢字楷書「十」を右上がり

に変形して作った女書で「事」に相当する語を記している。

- ・「落」と「多」に相当する語は声調を異にするけれども声母と韻母は同音なので同一の女書で記されている。なお、この女書が何に拠るものか直ちに理解するのは困難である。



■なお、日本の平仮名や片仮名の成立の歩みと女書の音節文字化の歩みとの間にどのような共通点と相違点があるか興味深いところである。女書については、漢字中国語が行われる中、なぜこのような文字組織が生まれたのかという問題がある。陳其光 2006 によると、女書は宋代以降打ち続いた当地の義軍（瑶族、漢族、他の少数民族を含んでいた）と中央政府との抗争の間において、秘密保持の為に義軍方によって作られ使用されたものであったが、後に使用範囲が縮小し、女性だけが使用するようになったという。他にさまざまな説があり定まってははいないようである。その解決は今後の研究に待ちたい。

参考文献〈発行年順〉

趙麗明 1992. 『中国女書集成』北京：清華大学出版社。

史金波・白浜・趙麗明主編 1995. 「女書年代考」, 『奇特的な女書』北京語言学院出版社, 157-166 頁。

遠藤織枝・黄雪貞主編 2005. 『女書の歴史と現状 一解析女書的新視点』北京：中国社会科学出版社。

陳其光 2006. 『女漢字典』北京：中央民族大学出版社。

(文責：吉池孝一)